

今にては粒餌に輕きすり餌にて、さまで活餌をも不飼羽を切り廣キ庭へ放し、猶さわぐは儘にして差置所相應にて皆不事に生立、鷄を料理するに牛刀を用ルとは是なるべし、何レ鳥に氣を付るには先醬を能く見極メ、たとへ孔雀大鳥なれども平醬にて、野山にても活餌勝相立、夫故に飼方六ヶ鋪、白鷄は丸醬にて雉子鷄の醬と同じ、平生粒餌而已にて生立たる鳥ならず哉、さあらば差而摺餌其外入念ては惡敷あるべし、諸鳥是に等シ、雛の内鳩より小く、鷄位にて雌雄わかり兼候はゞ、足へ氣を付、頭の處へ目を付、能く見分べし、鳥に心有ル人は自然と分るべし、地籠之内あまり地のかたきは惡し、少シやわらかにしてよろし、堅き方は足指痛まがり候もの、玄とり氣有ルよふに心懸ケ、水を引餌にて飼立、夏より秋迄稻子を飼候事宜敷、夏終日日の當り候は不宜、親鳥玉子落し候とも、二才迄はかへり薄し、三才より玉子皆かへり申候、雄は古鳥よろしきとの事は、諸事右之通、玉子は二十五日にてかへる、雛鳥の内に早く泊り木へとめならわせ候得ば、指まかり候事無之、満足に生立、折角大振りに出來候鳥を上とする、君命屋久島摩○薩之内尾間村にて神山へ錦鳥原村神山へ白鷄志戸子村住吉山江白鷄放シ飼を被仰付村近く一圍の山にては候得共、大山引續にて候ゆへ、飛去深山へ飛住は案中にて、後年彼島へ相見へ、其節志シのものあらずんば、屋久島自然と生ずるとも云べし、

〔下學集上氣形〕シヤコ鷗鳴而自呼、常好南飛、縱雖向也。

〔藏玉和諳集雜〕鷗鳩

鷗鳩といふ鳥のうはげの紅に散し紅葉の殘る也けり

鳥のうは毛の紅とは、鷗鳩と云鳥は、さむがりをするなり、仍秋の末になれば、もみぢのちるをせなかにおひかさねて、霜雪の寒をふせぐなり、深山にあり、鳴聲すごく淋しといへり、此鳥に山がら似たりといふ説有、